

ウカシェヴィッチによるカルナップ批判

— 形而上学の是非をめぐって —

松 田 克 進

序：「数理論理学と哲学」

ルヴフ・ワルシャワ学派を代表する哲学者の一人、ウカシェヴィッチ（Jan Łukasiewicz; 1878-1956）は、1936 年、論文「数理論理学と哲学」（Łukasiewicz 1936）⁽¹⁾ を発表した。発表媒体はポーランドの哲学ジャーナル『哲学批評（Przegląd Filozoficzny）』である。英語版のウカシェヴィッチ著作集（Łukasiewicz 1970）では 18 頁に収まるので、ほぼ「小品」と言ってよからう論文である。その内容は、ヤクビジャク（Augustin Jakubisiak; 1884-1945）というポーランド人神父かつ哲学者が〈数理論理学を用いる哲学〉に対して発表した批判に対する反批判である。

ヤクビジャクの批判そのものは（のちに簡単に紹介するように）まったく初歩的な無理解ゆえのものである。それゆえ、ヤクビジャクの批判とウカシェヴィッチの反批判を確認することそれ自体には（裏話的な面白さはあるものの）哲学的な意義はない。しかし、「数理論理学と哲学」には、実は、意外な、そして哲学的に非常に興味深い副産物が見出される。というのも、そこでウカシェヴィッチは、ウィーン学団の中心人物——それどころか、おそらく 20 世紀最大の哲学者の一人——であるカルナップ（Rudolf Carnap; 1891-1970）の初期思想を批判しているのである。その批判は実に手厳しい

(1) 「数理論理学」は“logistic”（ポーランド語では“logistyka”）の訳である。この語は「数学的論理学」や「記号論理学」、あるいは「論理計算」、さらには単に「論理学」と訳すことも可能である。

ものであり、議論の終盤でウカシェヴィッチはカルナップの立場を「危険な哲学的思弁 (risky philosophical speculation)」(Łukasiewicz 1936: 233) と評するまでに至る。

本論考で私は、「数理論理学と哲学」におけるウカシェヴィッチによるカルナップ批判を取り上げる。そして、数理論理学の駆使というスタイルにおいては完全に一致する両者の哲学観の、おもに形而上学の是非に係る、深い〈隔たり〉を明らかにしたい。——とは言え、いきなり本題に入るのではない。導入(第1節)として、ヤクビジャクによる数理論理学への批判と、それに対するウカシェヴィッチの反批判についても目配りしておく。なぜならば、そうすることで、どのような文脈においてウカシェヴィッチのカルナップ批判が姿を現したのか(言い換えれば、彼のカルナップ批判にはどのような動機があったのか)ということを確認できるからである。

第1節 ヤクビジャクへの反批判

1936年、ヤクビジャクは『外延から内包へ (*Od zakresu do treści*)』という哲学論文集を刊行した。その序文で彼は、1927年に開催された第2回ポーランド哲学会議でウカシェヴィッチが発表した短い論文「哲学における方法に寄せて (*O metodę w filozofii*)」を参照しつつ、数理論理学を使う哲学を次のように批判した。

人間精神が、カントの禁令に逆らって、周囲の实在に対するますます深い洞察力を獲得している一方で、哲学の数理論理的改革の擁護者たち (the defenders of the logistic reform of philosophy) は、その同じ人間精神に対して实在との一切の接触 (all contact with reality) を禁止し、また、それ [= 人間精神] を、内容の無いアプリアリな形式 (*a priori forms without content*) の不毛な研究——言い換えれば、怠惰なおしゃべり (idle talk) ——に集中させたがっている。(Łukasiewicz 1936: 219)

このようにヤクビジャクは、数理論理学を使う哲学者たちは世界の内実についてではなく論理の形式についての不毛な議論に終始していると批判したわけである。このような批判に対してウカシェヴィッチは猛然と反批判する。というのも彼は、ヤクビジャクが取り挙げた 1927 年の自分の論文で全く逆のことを書いていたからである。彼は言う。

私はくだんの論文で次のように書いた。すなわち、「我々は実在との接触 (contact with reality) を不断に求めなければならない。そうすることで、プラトンのなアイデアやカント的な物自体のような神秘的な存在者を生み出すのではなく、我々がそのなかで生き行動し、なんとかして改善したいと思う実在的な世界の本質と構造を理解するようにしなければならない」と。ヤクビジャク神父はわずか 2 ページしかない私の論文を最後まで読むことを怠ったのであろうか。(Ibid.)

要するに、ウカシェヴィッチは（数理論理学を使う）自分の哲学は論理の形式に閉じこもるような実在無視の哲学では決してなく、むしろそれとはまったく逆の、現実世界の構造を解明しようとする試みである、と言いたいのである。

さらに、ウカシェヴィッチは、ヤクビジャクが「論理経験主義を数理論理学と同一視」(ibid.: 221) する点をも批判する。ウカシェヴィッチによると、経験主義というのは哲学におけるひとつの動向であるが、他方「数理論理学は哲学的な動向ではないのみならず哲学におけるいかなる動向とも結びついていない」(ibid.: 222)。それゆえ、哲学者は数理論理学を活用するからといって論理経験主義にコミットするわけではなく、形而上学の否定にコミットするわけでも唯名論にコミットするわけでもないのである。言い換えれば、数理論理学というものは汎用的かつ中立的なのであって、哲学者はそれを用いるさい、形而上学の否定にコミットしないこともできるし唯名論にコミットしないこともできるのである。この汎用性・中立性という点で、数理論理

学は数学に似ている。ウカシェヴィッチは言う。「〔論理学という〕分野は今では哲学よりも数学に近づいている」(ibid.)。

数理論理学が形而上学の否定を含むか否か、という論点は本論考のポイントであるウカシェヴィッチによるカルナップ批判にも強く係るので、もう少し論じておく。ウカシェヴィッチは書く。

ヤクビジャクはその著書の12頁で「論理学者たちによってかくも強調された形而上学の否定は、ケーニヒスベルクの哲学者〔＝カント〕の遺産である」と続けている。この命題は2つの新たな誤解を含んでいる。本性的に、一方は歴史的な誤解であり他方は事実的な誤解である。後者は、数理論理学の研究者は形而上学を否定するはずだ、というものである。私がすでに述べたように、数理論理学は哲学ではないのであって、それゆえそれは形而上学に係らない。数理論理学は形而上学を否定も肯定もしない。なぜならばそれ〔＝形而上学〕に係っていないからである。〔略〕哲学と数理論理学の両方に従事している何人かの哲学者は形而上学を否定する。それらのうちには、とりわけ、ウィーン学団の代表者たちが含まれる。この点については後にさらに論じるつもりである。(Ibid.: 225) (※傍点は引用者＝松田による)

この引用においてウカシェヴィッチはヤクビジャクの2つの誤解を指摘している。

第1の誤解は、カントが形而上学を否定したという、哲学史についての誤解である。確かにカントは純粹理性による形而上学（とりわけ神証明）を否定したが、実践理性や判断力によるそれを否定したわけではない。

第2の誤解は、数理論理学が形而上学を否定するというものである。ウカシェヴィッチは、この誤解は粗雑な一般化に他ならず、数理論理学そのものが形而上学を否定するのではなく、数理論理学を使う哲学者のなかでもとくに「ウィーン学団の代表者たち」が形而上学を否定するのである、と言う。

この「ウィーン学団の代表者たち」としてウカシェヴィッチがとりわけ意識しているのはカルナップである⁽²⁾。

ウカシェヴィッチによると、哲学史についてのヤクビジャクの誤解は〈カントが形而上学を否定した〉という点にとどまらない。というのも、〈ウィーン学団はカントの継承者である〉という哲学史理解もまったく的外れなものだからである。ウカシェヴィッチは言う。「ウィーン学団の代表者たちは、彼らが提唱する形而上学の否定がケーニヒスベルクの哲学者〔＝カント〕の遺産であるという想定に激しく抗議するであろう」(ibid.)。さらに言う。

カントの超越論哲学は、一方で、我々に認識不可能な物自体の存在を想定し、他方で、いくつかのアプリオリな認識形式を備えた精神の存在を仮定するのであるが、これはウィーン学団のメンバーが見るところでは最悪の類の形而上学と目されねばならない。ウィーン学団による形而上学の否定は〔略〕カントではなくヒュームの遺産なのである。(Ibid.: 225-6)。

ウィーン学団がカントではなくヒュームを継承したということの具体的証拠は何か。ウカシェヴィッチは、カルナップがその論文「科学的論理学の課題」で、ヒュームの『人間知性探求』の第12章第3部のきわめて有名な（多くの哲学史教科書で参照されているであろう）箇所（ヒューム 2004: 154）

-
- (2) 「代表者たち」と複数形が用いられているのだからシュリックやノイラートのことも意識しているが、少なくともこの小論の中に彼らの名前はいつさい登場しない。一言しておけば、ウカシェヴィッチとシュリックの立場には、真理整合説や規約主義（あるいはプラグマティズム）に対する拒否感という共通点が認められる。これは私の単なる推測にすぎないが、ウカシェヴィッチが批判対象者としてシュリックの名前に言及しない背景には、そのような事情があったのかもしれない。少なくとも1936年のこの小論が書かれた時点でウカシェヴィッチが、Schlick（1934）を読んでいた可能性は高い。

を引用していることを確認する。当該箇所においてヒュームは、有意味な命題を、数量に係る論証可能な命題（いわゆる分析命題）と、事実や存在に係る実証可能な命題（いわゆる総合命題）とに二分し、そのどちらの命題も含まない「神学あるいはスコラ形而上学の書物」は「炎に投ぜよ」と言う。なぜならば、「それは詭弁と幻想しか含むことができないのだから」である。要するにウィーン学団（典型的にはカルナップ）は、形而上学を全否定しなかったカントではなく、形而上学を全否定したヒュームを継承したのだ、とウカシェヴィッチは指摘するのである。

第2節 カルナップ批判（1）：宇宙の構造の問題

カルナップ批判の端緒

ウカシェヴィッチはカルナップによる形而上学批判の要点を次のように集約する。

カルナップはこれらの〔ヒュームの〕言葉は次の見解の古典的定式化であると見なしている（もっとも私は彼〔＝カルナップ〕が正しいことを疑うのであるが）。すなわち、数学的命題と事実命題のみが有意味であり、他方、形而上学的命題は無意味である、という見解である。これがカルナップの形而上学否定の要点である。さらに付け加えれば、カルナップによると、数学的命題には論理的命題と言語の論理的構文論の命題も含まれており、論理的構文論は彼によれば言語の数学以外の何物でもない。（Łukasiewicz 1936: 226）

この引用中、ウカシェヴィッチは括弧書きのなかで「私は彼が正しいことを疑う」と書いている。すなわち、彼は数学的命題と事実命題のみが有意味であるとは考えず、少なくともある種の形而上学の命題も有意味であると示

唆しているのである。まさに〈ある種の形而上学の有意味性〉という点に、ウカシェヴィッチによるカルナップ批判の端緒がある。

繰り返しになるが、論文「哲学と数理論理学」はヤクビジャクの数理論理学批判に対する反論である。ヤクビジャクは数理論理学は形而上学の否定を含むという誤った認識から数理論理学を批判したとウカシェヴィッチは述べる。しかし、他方で、数理論理学をフルに活用するウィーン学団（とりわけカルナップ）は間違いなく形而上学を全否定しているのである。そこで、この論文の後半で、まさに議論の自然な流れに沿って、ウカシェヴィッチは自らの立場がウィーン学団（とりわけカルナップ）とは異なることを明示するという作業を敢行するのである。彼は言う。

私はここで、この問題についての私自身の意見を定式化し、私自身を、ウィーン学団の諸見解およびとりわけカルナップの見解から分離しておきたい。私は自分の関心を哲学から数理論理学へとシフトさせた。数理論理学は、その内容ゆえではなくその方法ゆえに私の哲学観に大きな影響を与えた。こういったことすべてが起こったのは、ウィーン学団が形成されるよりも前のことなのである。(Ibid.: 226)

ウカシェヴィッチの〈カント嫌い〉

もちろん、ウカシェヴィッチとウィーン学団には共通点もある。否むしろ哲学史の大きな流れからすると非常に近い側面がある。両者とも従来の〈思弁的〉な哲学に手厳しい批判を加え、そのためにフレーゲ＝ラッセル流の数理論理学を徹底的に活用する。その点ウカシェヴィッチにも当然ながら〈思弁的〉な形而上学に対する拒否感はある。ウカシェヴィッチとウィーン学団（カルナップ）の相違は、その拒否感が形而上学全般に及ぶか否かである。ウカシェヴィッチは、〈思弁的〉な形而上学を否定するのであって形而上学一般を否定するのではない（その点ポパーに似ている）。では、ウカシェ

ヴィッチがやり玉に挙げる形而上学とは具体的にはどのようなものか。彼が具体的に挙げているのはカントである（この点、カントを尊敬したポパーとは大いに異なる）。

ウカシェヴィッチはカントの哲学的スタイルについて言う。

1924 年、カント生誕 200 年に寄せて書いた論文⁽³⁾で、私は次のように書いた。「カントの哲学および近世哲学一般の学問的価値についての私の批判的見解はあまりに主観的かもしれない。しかし、その見解は、私が哲学を離れれば離れるほど、そして哲学的思弁を科学的方法から区別する隔たりから哲学を振り返れば振り返るほど、それだけますます私に迫り来るのである。〔略〕分析判断と総合判断のまさにその区別さえカントによって科学的に定式化されてはいない。〔略〕我々に内在すると言われるところの所謂〈時空間の純粋な観念〉とは何かを理解することは不可能である。物自体の世界は、ライプニッツのモナドロジーと張り合える形而上学的な虚構である。我々がそれを科学的な批判の諸要求に適應するとき、カント哲学はカードでできた家のように崩壊する。あらゆる段階において我々は、あいまいな概念、理解不可能な言明、正当化されない主張、矛盾、そして論理的誤謬を見出す。〔略〕カントがドイツ観念論哲学を引き起こしたのである。」（Ibid.: 226-7）。

このように、ウカシェヴィッチにおける〈カント嫌い〉は判然としている。カントとドイツ観念論との近さ・遠さをどのように解釈するかというのは哲学史における非常に微妙な問題であるが、ウカシェヴィッチの哲学史観ではカントは哲学的思弁の典型でありドイツ観念論の発火点なのである。そして、

(3) 「カントと近代哲学（Kant and modern philosophy）」というタイトルの論文（原文はポーランド語）である。

彼は次のように哲学的思弁の非学問性を手厳しく指摘する。「哲学者から論理学者に転じた者⁽⁴⁾〔略〕は、これまで存在してきたような哲学的思弁の価値がいかなるものかを知っている。〔略〕そのような仕事はいかなる学問的価値も持ち得ず、そして時間と精神的エネルギーの浪費なのである」(ibid.: 228)。

形而上学が哲学的思弁に堕さない条件

すべての形而上学が哲学的思弁なのではない。形而上学が哲学的思弁に堕するか否かはその方法に拠る。また、この方法が形而上学で扱うことができる問題を限定する。このことをウカシェヴィッチは次のように書く。

数学的ないし〈論証的〉な方法 (mathematical and “demonstrative” method) は形而上学的な問題にもまた適用されねばならない。先ほど参照した論文⁽⁵⁾において私は書いた。「形而上学的な諸問題は〔略〕数学者あるいは物理学者によって用いられているのと同じ充分テストされた方法によってアプローチされねばならない」。〔略〕私が却下 (reject) されるべき問題に言及したさいに何よりもまず念頭に置いていたのは、世界の本質すなわち物自体 (the essence of the world or things in themselves) に係る問題である。というのも、このような問題を理解可能な仕方ではいかに定式化すればよいのか私は分からなかったし、今も分からないからである。(Ibid.: 228-9)

要するに、形而上学が哲学的思弁に陥らないようにするためには、その方法は「数学的ないし〈論証的〉な方法」でなければならない、この方法が適用

(4) 要するにウカシェヴィッチ自身のことである。

(5) 「カントと近代哲学」である。

できないような問題は「却下」されねばならないのである（そのような問題を取り上げてしまえば形而上学は哲学的思弁に墮するのである）。では、どのような問題が却下されるべきかと言えば、それは「世界の本質すなわち物自体」についての問題である。

それでは、なぜ「世界の本質すなわち物自体」については「数学的方法」が適用できないのであろうか。「数学的方法」としてウカシェヴィッチが考えているのは、概略、「公理論（axiomatic theory）」と一般的に呼ばれているもののに相当する。彼は言う。

原初的ないし無定義的な用語（primitive or undefined terms）として我々は、その意味が事例によって全面的に説明（explain from all sides by examples）され得るような概念を選ばねばならないであろう。〔略〕他の全ての概念は無条件的に原初的な用語でもって定義されねばならないであろうし、他の全ての定理は無条件的に、論理学において採用されるような公理および証明規則でもって証明されねばならないであろう。（Ibid.: 229）

要するに、使われる語は、無定義用語か、無定義用語によって定義される語に限定され、主張される命題は、公理か定理（＝公理および証明規則によって証明される命題）に限定されるのである。ただし、たった今引用したテキストの第1文には注意しなければならない。そこでウカシェヴィッチは、〈無定義用語の意味は事例によって余すところなく説明されなければならない〉という趣旨を述べている。よって、彼にとっての「数学的方法」というのは単なる構文論に帰着するものなのではなく、〈無定義用語の意味は事例によって余すところなく説明されねばならない〉という意味論をも包含するものなのである。そして、このことが、形而上学において扱われる問題を限定することになる。なぜならば、公理論の出発点となる無定義用語が、事例によって説明され得ないような問題は却下されねばならないからである。ま

さしくそれゆえに「世界の本質すなわち物自体」についての問題は却下されねばならないのである。

それでは、形而上学において却下されない問題とはどのようなものか。言い換えれば、無定義用語が事例によって説明され得る問題とは具体的にいかなるものか。ウカシェヴィッチは言う。

このような〔数学的〕方法は、世界の有限性・無限性の問題、空間・時間・因果性・目的論そして決定論の問題に適用され得るであろう。とりわけ私がつねに最大の興味をいただいていたのは、決定論と非決定論の問題である。私はそれを多値論理の問題と結び付け、上に素描された〔数学的〕方法がその問題を解決するためのアプローチとして役立ち得ると考えたのである。(Ibid.)

ポイントは形而上学と経験との関係である。カルナップによると、形而上学で扱われる一切の（いわゆる）問題は経験といかなる接点も持たない。他方、ウカシェヴィッチによると、確かに世界の本質すなわち物自体の問題についてはカルナップの主張は妥当するが、可能な経験の範囲内に位置する形而上学の問題も存するのである。ウカシェヴィッチは言う。「カルナップは形而上学的な問題を無意味として拒絶する。というのも、彼はカントに従い、あらゆる経験の完全に外に残る何か、例えば事物の本質、物自体、絶対者などについての知識を表現していると主張する諸命題のみを形而上学的な命題に数えるからである」(ibid.)。すなわち、形而上学と経験との一切の連結を切り捨てるという点において、カルナップはカントを継承しているというわけである。

宇宙の構造についての問題

ウカシェヴィッチにとっての形而上学の問題とは、繰り返せば、「世界の

有限性・無限性の問題、空間・時間・因果性・目的論そして決定論の問題」である⁽⁶⁾。これを彼は端的に「宇宙の構造（structure of the universe）についての諸問題」（ibid.: 230）と表現し直す。これらの問題こそが形而上学の問題であり、それらについては数学的方法が適用可能であり、経験との連結が可能なのである。要するに、ウカシェヴィッチにとっての「形而上学」は今日一般に「科学基礎論」と呼ばれるものに相当するのである。

それでは、形而上学を全否定するカルナップは、ウカシェヴィッチが形而上学のテーマとするところの宇宙の構造をどのように扱うというのであろうか。この点についてのカルナップの見解をウカシェヴィッチは次のように解説する。

カルナップにとっては、これら〔＝宇宙の構造についての〕すべての問題は単に言語の問題（problems of language）にすぎないのであり、あるいは、より厳密に言えば、言語の構文論の問題（problems of the syntax of language）に過ぎないのである。さて、私は言語の構文論についてのカルナップの厳密な諸研究を完全に認めている。〔そもそも〕この分野における研究はワルシャワで始まったのである。その地で、レシニエフスキ教授によって先鞭がつけられ、後にタルスキ博士によって体系的な基礎が築かれたのであり⁽⁷⁾、タルスキの業績はその後のカルナップの研究に影響を与えたのである。〔略〕しかし、私はカルナップによる次のような定式化には決して賛成できない。すなわち、

(6) ウカシェヴィッチは非決定論者である。彼の決定論批判について、私は松田（2022）において主題的に、また、松田（2023b）においてスピノザの決定論との対比のもとで論じたことがある。

(7) タルスキといえば意味論の業績が著名であるが、ここでウカシェヴィッチが念頭に置いているのは、構文論に係るタルスキの1930年の論文「メタ数学のいくつかの根本概念について（Über einige fundamentale Begriffe der Metamathematik）」である。

「かくして、空間と時間の構造に関するすべての問いは言語の構造についての構文論的な問い——とりわけ、空間座標および時間座標についての形成規則および変形規則の構造についての問い——なのである」⁽⁸⁾。同じ箇所でもカルナップは、因果性と決定論の問題についても同様の定式化を行っている。そのような見解を詳細に反駁するためには別の論文が必要となろう。ここで私にできるのは、この問題についての私の見解を単に素描することだけである。(Ibid.: 229-30)。

ウカシェヴィッチが批判しているカルナップの立場とは、おおよそ次のようなものである (Cf. Carnap 1935: 85-7)。宇宙の構造 (時空間の構造や決定論の是非) は真の哲学的問題ではない。これを哲学の問題として敢えて扱えば、形而上学というナンセンスに陥る。これは哲学の問題ではなく、結局のところ言語選択の問題にすぎない。例えば、時空間をユークリッド的なものとして語る言語 L_1 と非ユークリッド的なものとして語る言語 L_2 があるとすると、 L_1 と L_2 のどちらが真であるかと問うのはナンセンスである。科学者は、問題を処理するにあたり例えば L_2 が便利ならば L_2 を採用するだろう。そのさい、空間が真に非ユークリッド的であるか否かというのは問題とならない。問題となるのは、どちらの言語の方が「好都合 (suitable)」(ibid.: 87) かということにすぎない (ここにはポアンカレの規約主義が濃厚に影響している)。このように、宇宙の構造についての問題というのは、一見すると真理をめぐる哲学的問題のように思われるかもしれないが、実は言語 (構文論) の選択の問題に帰着するのである。

ウカシェヴィッチは、決して、言語選択に帰着する問題が存在することを否定するわけではない。例えば、すべての物体が延長的であるか否かという問題は、「物体」をどう定義するかという言語の問題に帰着することを彼は

(8) これは、ウカシェヴィッチが脚注で断っている通り、カルナップの英文著書『哲学と論理的構文論』(Carnap 1935)、86 頁からの引用である。

認めるのである。しかし、哲学的問題——例えば、宇宙の有限・無限性をめぐる問題や、決定論の是非の問題⁽⁹⁾——がすべて言語選択の問題に帰着するというカルナップの立場を彼は判然と否定する。彼は言う。

宇宙が空間的に有限であるのか無限であるのかを、我々が言語を足場としていかに決着できるのか、私には分からない。というのも、「宇宙」によって私は有限あるいは無限な何かを意味するのではなく、それゆえ私は、分析的な命題ではなく総合的な命題に係っているからである。〔略〕同じことが決定論と因果性の問題にもあてはまる。因果的必然性が世界において一切を律しているのか、あるいはそうではないのか、のどちらかであり、あらゆるものが前って決定されているか、あるいはそうではないのか、のどちらかであるが、このこともまた、言語の構文論についての我々の規則のうちの何かによって決まることはできない。〔宇宙の構造に関する〕これらの問題は、私にとっては、事實的（factual）で実在的（real）で客觀的（objective）なものであり、単に形式的（formal）で言語的（linguistic）な問題ではないのである。（Łukasiewicz 1936: 230-1）

このようにして、ウカシェヴィッチとカルナップの対立点が前景化してくる。差し当たりそれは、宇宙の構造という問題をどのように捉えるかという対立点なのである。ウカシェヴィッチは、それは哲学的問題であり、実在のあり方への問いであると捉える。他方、カルナップは、それは哲学的問題ではなく、単に言語選択の問題にすぎないと捉える。もちろん、宇宙の構造の

(9) 宇宙の構造についてウカシェヴィッチが最も関心を寄せた問題は決定論の是非の問題である。私はかつて、この問題についてのウカシェヴィッチの議論を松田（2022）で詳しく論じ、また、決定論を巡るスピノザとウカシェヴィッチの思想的対立については松田（2023b）で論じた。

問題は伝統的には哲学的問題（の典型的なもの）と見なされてきた。それゆえ、この対立点をめぐっては、ウカシェヴィッチは伝統肯定の側に立っており、カルナップは伝統否定の側に立っている。一般的に、伝統を否定するには強力な道具立てがなければ難しい。もちろんカルナップにはそのような道具立てが（少なくとも）2つあった。ひとつは、ヒュームに由来するとされる、〈有意味な命題は分析命題と総合命題に限定される〉という思想である（これについては第1節の末尾で取り上げた）。そして、もうひとつは、「話法（Redeweise; mode of speech）」の区別に関するカルナップ独自の（そして初期カルナップを理解するうえできわめて重要な）思想である。この思想は、1931年から着想され始め、1934年の『言語の論理的構文論』（カルナップ第2の主著）の第5部において詳細に展開され、Carnap（1934）および Carnap（1935）において、その思想のエッセンスが紹介されている。もちろんウカシェヴィッチも、カルナップが宇宙の構造の問題を単なる言語選択の問題として捉える背景ないし根拠に、この「話法」区別の思想が存することを強く意識している。それゆえ彼のカルナップ批判は、当然ながら、「話法」区別の思想の批判へと歩を進めることになるのである。節を変えてこの点について考察しよう。

第3節 カルナップ批判（2）——話法の区別

熱膨張の事例とその問題

カルナップは、物事を語るさいの話法を、「内容的話法（inhaltliche Redeweise; material mode of speech）」と「形式的話法（formale Redeweise; formal mode of speech）」とに区別する⁽¹⁰⁾。なぜ彼がこのような区別をするかという、カ

(10) この訳語はカルナップ（1986: 191）に準拠している。蟹池（2007: 461）は「実質的発話様式」および「形式的発話様式」という訳語を、丹治（2009: 46）は「実質話法」お

ルナップはこの区別を用いておおよそ次のように主張したいからである (cf. Carnap 1935: 78-82)。すなわち、形而上学的な問いが生じる要因は、形式的話法を使うべき場面で内容的話法（これは疑似問題を誘発する）を使ってしまうこと——要するに、話法における混乱——に存するのであり、それゆえ、形而上学を回避するためには、内容的話法を形式的話法へと適宜翻訳すべきである、という主張である。

ウカシェヴィッチは、カルナップのこのような議論を冷ややかに眺める。ウカシェヴィッチは書く（これは先ほどの引用の直後の箇所である）。

私は、カルナップが客観的問題を言語的問題へと還元しようとするその方式に全面的な異を唱える。彼は、事実を写し出す客観的命題——例えば、「このバラは赤い」——に加えて、我々が——彼の表現を用いれば——「内容的 (content-wise)」に語る時に形成される疑似客観的命題 (pseudo-objective propositions) を区別する。そのような内容的話法 (content-wise mode of speech) の各々は、形式的話法 (formal mode of speech) によって言い換えられるのであり、カルナップによると、後者が唯一の適切な話法である。例えば、「物体 a が今膨張しているという事実 (fact) は、物体 a が加熱されているという事実の自然必然的な結果 (consequence) である」という命題は、そのような内容的に定式化された疑似客観的命題である。これは、次のような、形式的に定式化された命題によって言い換えられる。『a が膨張している』は、『a が加熱されている』という命題と（科学によって現在受け入れられている）もろもろの物理法則からの帰結 (consequence) である。カルナップが付け加えるところでは、内容的話法で定式化された諸命題は実際には存在しない何らかの事実的な関係が存在するという幻想 (illusion) を生み出してしまい、〔略〕それゆえにこれらの

よび「形式話法」という訳語を用いている。

命題は誤解さらには矛盾をもやすやすと引き起こしてしまう。それゆえに、少なくとも決定的な場面においては、我々は内容的話法を避け、形式的話法をそれに代替すべきだとされるのである。(Łukasiewicz 1936: 231)。(11)

以上のように、話法についてのカルナップの区別を——カルナップ自身が示す物体の熱膨張の事例を使って——提示した後に、ウカシェヴィッチは次のように批判する。

上に引用された事例において、形式的話法が内容的話法に対応していることに私は同意する。しかし、カルナップの定式化からすると、彼は、〈物体の膨張とそれが加熱されることとの間にはいかなる事実的な関係もない〉と認識しているようであるが、彼は、どのようにしてそのことを認識するのであろうか。なぜ彼は、この場合に内容的話法

(11) 以上の引用箇所末尾でウカシェヴィッチは脚注を設け、引用箇所のなかで言及された話法の区別の事例について、カルナップ自身のテキストをドイツ語で引用する。引用されるテキストは、カルナップの『科学的論理学の任務』(Carnap 1934) の 14 頁からのものである。当該の引用を念のために以下に訳出しておく。

2a. 物体 a が今膨張するという事態 (Umstand) は、a が加熱されるという事態の自然必然的 (naturnotwendig) な結果 (Folge) である。

2b. 「a が膨張する」という文は「a が加熱される」という文と (現在科学的に認められている) もろもろの物理法則との帰結 (Folge) である。

内容的話法のもろもろの文は、対象関係性 (Objektbezogenheit) を、それが全く存在しない場面で見せかける。それらは、そうすることで容易に、非明晰性と疑似問題 (Scheinprobleme) を、それどころか矛盾を生み出してしまふ。したがって、決定的な場面においては内容的話法 (inhaltliche Redeweise) をできるかぎり回避し、その代わりに形式的話法 (formale Redeweise) を用いることが賢明なのである。

が我々を誤らせ得ると考えるのであろうか。これらは、いっさいの正当化を欠く独断的主張 (dogmatic assertions which lack all justification) である。(Ibid.: 232)

ウカシェヴィッチは熱膨張の事例については、形式的話法と内容的話法の対応関係 (correspondence) そのものは認める (すなわち、そのような言い換えが可能なことは認める)。では、彼は何に反対しているのであろうか。彼が反対しているのは、内容的話法が誤謬の原因である、というカルナップの主張に対してである。「加熱が膨張の原因である」という表現のどこが問題だと言うのか。カルナップは、この表現によって我々は、因果関係が実在するという幻想へと導かれると言う。しかし、ウカシェヴィッチは、因果関係が実在しないというカルナップの主張は全くの独断にすぎない、と批判するのである。ちなみに、(事象接続の規則性 regularity を超える意味での) 因果関係の実在を認めないというのはいわゆる実証主義の基本的立場のひとつである。(少なくとも初期) カルナップはその立場に与しており、ウカシェヴィッチはそのような立場を独断と非難しているわけである。

明星の事例とその問題

ウカシェヴィッチは、カルナップの英語著作『哲学と論理的構文論』(Carnap 1935) の 61 頁から次のような別の事例を取り出す (ibid.: 232 n.18)。

擬似対象文 (Pseudo-object-sentences)。内容的話法。

4b. 宵の明星と明けの明星は同一 (identical) である。

構文論的な文 (Syntactical sentences)。形式的話法。

4c. 「宵の明星」と「明けの明星」は同義的 (synonymous) である。

カルナップは、この事例についても内容的話法の「欺瞞的性格 (deceptive

character)」を指摘する。これに対して、ウカシェヴィッチは、(先ほどの熱膨張の事例とは異なり) この明星の事例の場合にはそもそも話法の対応関係は成り立たない(すなわち、この事例において、4c. は4b. の言い換えにはなっていない)と主張する。その理由を彼は次のように言う。

日没後まもなく西の空に現れる星が日の出少し前に東の空に見えるのと同じ惑星である、ということに気づくためには、多くの経験的観察が必要であったと私には思われる。この事実の理解は、二つの用語が同義的であるという事実の言明することとは全く異なるものである。私は「栗毛馬 (bay horse)」と「赤茶馬 (reddish-brown horse)」という用語が同義であることを直ちに認めることができる。なぜならば、「栗毛馬」でもって私はまさしく赤茶馬のことを意味するからである。しかし、「宵の明星」と「明けの明星」が同一の対象を指示しているということは言語を基にしては決定され得ないのである。(Ibid.: 232)

以上に見てきたように、カルナップによる話法の区別に対してウカシェヴィッチは二段階の批判を行っている。第一の批判は、話法の区別を認めるとしても、内容的話法が「欺瞞的性格」を有するというのは独断であるという批判である。そして、第二の批判は、そもそもカルナップの事例のなかには話法の対応関係が成り立たない(すなわち、話法を変えればそもそも意味が異なってしまう)事例が含まれているという批判である。このように話法の区別に対するウカシェヴィッチの批判は複合的である。しかし、そこには一貫した態度が認められる。それは、内容的話法を形式的話法へと読み換えることで客観的問題を言語的問題へと書き換える——あるいは(厳しい言葉を使えば)すり替える——ことへの異議申し立てである。

第4節 カルナップ批判 (3) — 数理と実在との関係

カルナップ批判の帰着点

話法の区別に対するウカシェヴィッチの以上のような指摘は十分に自然であり、その限りで説得的である。ならば、なぜカルナップは、そのような（かなり無理のある）話法の区別を持ち出してまで、客観的問題を言語的問題へと書き換えようと試みるのであろうか。ウカシェヴィッチによると、カルナップによるそのような試みの背景には、数理（論理学や数学）と実在との関係についての〈誤解〉が存する。このようにして、ウカシェヴィッチのカルナップ批判は、最終的に、数理と実在との関係という重大問題に行き着くことになるのである。彼は言う。

私が考えるところ、カルナップにおける、ある種の客観的 (objective) な問題を言語的 (linguistic) な問題へと還元しようとする試みは、アプリオリな学問とそれらが実在の研究において果たす役割についての彼の間違った解釈に由来する。そのような誤った見解はウィトゲンシュタインからカルナップによって継承されたものである。ウィトゲンシュタインは、すべてのアプリオリな命題——すなわち、論理学と数学に属する命題——はトートロジーであると捉える。カルナップはそのようなすべての命題を分析的 (analytic) と呼ぶ。〔略〕さらに、ウィトゲンシュタインとともにカルナップが信じるところでは、アプリオリな命題は実在についていかなることも伝えない。彼らにとっては、〔論理および数学という〕アプリオリな学問分野は実在の認識を容易にする道具 (instruments) にすぎないが、世界についての科学的な解釈は、もし必要ならば、それらアプリオリな要素なしに済ませることができる。(Ibid.: 232-3) (※傍点は引用者=松田による)

このように、ウカシェヴィッチの見るところでは、カルナップはウィトゲンシュタインから次のような見解を継承してしまった。すなわち、論理学や数学に属するアプリオリな諸命題は、すべてトートロジーないし分析的命題であって、「実在についていかなることも伝えない」。数理は、世界についての主張でもなければ解釈でもない。それは、科学的認識を容易にする「道具」にすぎないのであり、科学的認識の本体を構成するものではない。その意味で、数理は科学にとって非本質的な添え物にすぎない。このような見解である。——そして、ウカシェヴィッチはそれをきっぱりと否定するのである。彼は言う。

さて、アプリオリな学問分野、そして実在の研究におけるそれらの役割についての私の見解は〔カルナップやウィトゲンシュタインとは〕全く異なる。我々は今日、幾何学の異なる体系が存在するのみならず論理学の異なる体系もまた存在するということ、さらに、それらが相互に翻訳され得ないという特質を有するということを知っている。私が確信するところでは、これらの論理体系のうちのただ一つのものが実在世界において妥当的 (valid) ——言い換えれば、実在的 (real) ——であり、それは、ただ一つの幾何学の体系が実在的であるのと同じことなのである。なるほど今日、それがどの体系なのかを我々はまだ知らないものの、私は以下のことを疑わない。すなわち、経験的調査 (empirical research) によって、いつの日か、宇宙空間がユークリッド的であるか非ユークリッド的であるかが、また、もろもろの事実のあいだの関係が二値論理 (two-valued logic) に合致するか多値論理 (many-valued logics) のひとつに合致するか、が論証されるであろうということである。すべてのアプリオリな体系は、それらが実在に適用 (apply) されるやいなや、事実によって検証 (verify) されねばならない自然科学の仮説 (natural-science hypotheses) となり、それは物理仮説の場合と同様なのである。形而上学の問題に対する私

のアプローチは以上のような見解と結びついているのである。(Ibid.: 233) ⁽¹²⁾ (※傍点は引用者＝松田による)

以上のテキスト（その内容はきわめて高密度である）を敷衍ないし解凍すれば次のようになろう。——論理や数学にはさまざまな共約不可能な（＝同時に成り立たない）バージョンがある。典型的な事例を挙げれば、幾何学にはユークリッド幾何学と非ユークリッド幾何学（その中にも複数のタイプ）が存在する。論理学には二値論理と多値論理（その中にも複数のタイプ）が存在する。カルナップにとっては、論理や数学のどのバージョンが真理でありどのバージョンが虚偽であるかということは問題にならない。なぜならば、彼にとっては、数理は実在について「何も語らない」からである。数理について問題になるのは、ひとえに、どのバージョンが特定の科学の営みにおいて便利か否かということだけである。しかし、これは間違いである。数理のバージョンは、自然科学の単なる道具ではなく、（物理仮説と同様に）自然科学の仮説なのであって、どのバージョンが真であるか否か（＝実在に合致するか否か）というのは、経験的に検証されるべきものである。要するに、数理は「道具」ではなく「仮説」である。その意味で、数理のどのバージョンを真なるものと見なすかという形而上学の問題を、言語選択の問題

(12) ここに引用した文章の末尾に Łukasiewicz (1970) の編者ボルコフスキは次のような注を付している。「論理学と実在との関係については、この書物 [= Łukasiewicz 1970] の「数理論理学を擁護して (In Defence of Logistic)」〔略〕を参照されたい。そこにおけるウカシェヴィッチの立場はいくぶん異なっている。同じくこの書物の「直観主義的な演繹理論について (On the Intuitionistic Theory of Deduction)」〔略〕において彼はこの問題に再び論及するが、そのときの彼の見地は判然と異なっている」。——このように、論理学と実在とのウカシェヴィッチの見解は時代によって変化してゆくのであるが、本論考において私は、彼の見解をあくまでも、彼の「数理論理学と哲学」におけるそれに限定して論じることにする。

(=いかなる言語が便利か否かという問題)に書き換えるカルナップの主張は的外れなのである。

数理はいかにして仮説になるのか

以上に見たように、ウカシェヴィッチは、数理のバージョンは物理理論と同様に「自然科学の仮説」であるとしている。そして、ここにカルナップとの鋭い対立点がある。しかし、注意しなければならない。彼は、ミルが唱えたような、論理学や数学をも経験からの一般化と見なす立場に立っているわけではない。彼は、二つ前の引用箇所、数学と論理学を「アприオリな学問」と呼び、数学や論理学に属する命題を「アприオリな命題」と呼んでいる。決して彼は、論理学や数学のアприオリ性を否定しているわけではないのである。

具体的に言えば、ウカシェヴィッチにとって、非ユークリッド幾何学や三値論理の体系はやはりアприオリな体系なのである。他方で、彼はこれらが「自然科学の仮説」であるとも言う。それでは、これらの体系のアприオリ性とその「自然科学の仮説」としてのステータスとはどのように両立するのであろうか。

直前の引用箇所、彼が「適用 (apply)」という表現を用いていることに注意しなければならない。これがキーワードである。——非ユークリッド幾何学や三値論理の体系のアприオリ性は決して否定されない(すなわち、それらは経験を俟たずに案出されたものである)。しかし、これらの体系がひとたび実在に「適用」されるや、それらは実在のあり方(=宇宙の構造)についての特定の内容を伴った主張と解釈されねばならない。それらは実在についての主張なのである。それゆえ、それらのステータスは、経験によってその真理性が検証されるべきもの——すなわち「仮説」——へと移行する。要するに、アприオリな数理は、実在に「適用」されることによって、アポストリオリに検証されるべき「自然科学の仮説」となるのである。

結び

歴史的経緯

ウカシエヴィッチとカルナップは対面したことがあるのだろうか。——おそらく、ある。

1930年2月、ルヴフ・ワルシャワ学派の論理学者タルスキがウィーンを訪問した (Fefferman & Fefferman 2004: 77ff.)。そのさいタルスキはカルナップを含むウィーン学団の面々（そのなかにはゲーデルも含まれる）と対談し、彼はそれら面々のうちからカルナップをワルシャワに招待し、カルナップはこの招待に応じる。このようにしてルヴフ・ワルシャワ学派とウィーン学団との人的交流が本格的に開始する。

カルナップの知的自伝 (Carnap 1963) によると、彼は1930年11月にワルシャワを訪れ、ワルシャワ哲学協会の招待に応じて、3つの講演を行った (ibid. : 30f.)。それらのテーマは、「物理言語において定式化された心理学」「形而上学の排除」「論理的推論のトートロジー的性格」である。カルナップは同書において、そのときに自分が、タルスキ、レシニエフスキ、コタルビンスキと議論したことには触れているが、ウカシエヴィッチの名前にはまったく触れていない。しかし、ウカシエヴィッチはこのときワルシャワ大学の現役教授であり⁽¹³⁾、しかもタルスキの師であり、レシニエフスキ、コタルビンスキの年長の同僚である。当時、彼こそがルヴフ・ワルシャワ学派の屋台骨だったのである。そのような状況からすると、カルナップは1930年のワルシャワ訪問のさいにウカシエヴィッチにも会った、と考えるのがきわめて自然である。そしてほぼ間違いなく（と私は推測する）、ウカシエヴィッ

(13) 自然科学部の教授である。彼は1939年までその職位に留まることになる。なお、1939年はナチスドイツがポーランドに侵攻し、古典的なルヴフ・ワルシャワ学派が事実上の終焉を迎える年である。

チはカルナップの講演のひとつ「形而上学の排除」を直接聴いたことであろう。

1930年11月という時点は、カルナップがその代名詞となる論文「形而上学の排除」(Carnap 1932)を発表するほんの少し前である。ひょっとするとウカシェヴィッチは、1930年11月の講演によってカルナップの徹底的な反形而上学思想に初めて接したのかもしれない。いずれにせよ、この講演を聴いた(であろう)ウカシェヴィッチはきっとその反形而上学の徹底性に、〈これはやりすぎである〉という違和感を感じたことであろう。もちろん「物自体」や「絶対精神」や「無の無化」をめぐる思弁的な形而上学に対する批判についてはウカシェヴィッチも全く同意したに違いないが、カルナップの反形而上学はそこで止まらない、もっと徹底的なものだったからである。そして、1934～1935年になると、カルナップは話法の区別を本格的に持ち出し、内容的話法の「欺瞞的性格」を主張することで反形而上学的議論を過激化する。この時点で、ウカシェヴィッチはおそらく眉を決定的にひそめ、〈これは危険である〉と思ったことであろう。

まさにその直後である。1936年、ヤクビジャクの『外延から内包へ』が出た。そのなかでヤクビジャクはウカシェヴィッチ批判を書いていた。それは、数理論理学を使う哲学者は形而上学を否定し言語の形式の問題を扱っているだけである、という趣旨であった。これを読んだ時のウカシェヴィッチの想い(の少なくとも一部)を想像することはそれほど難しくはない。彼は次のように想ったのではなかろうか。〈ヤクビジャクの批判は私には当たらない。ヤクビジャクは私とカルナップを混同している。彼の批判は、カルナップにこそ向けられるべきものである〉。——そしてウカシェヴィッチは、論文「数理論理学と哲学」を起稿し、ヤクビジャクへの反批判の形を取りながらも手厳しいカルナップ批判を展開した。そのように推測されるのである。

強い言語論的転回への拒否

最後に補足として、「言語論的転回 (linguistic turn)」と呼ばれる哲学史上の動向との関連においてウカシェヴィッチのカルナップ批判を位置づけておきたい。——「言語論的転回」の最大公約数的理解はおそらく次のようなものであろう。すなわち、それは、19 世紀末から 20 世紀前半にかけて哲学史において起こった、哲学における主要なメソッドの転換である。旧いメソッドとは、私秘的（ないし主観的）とされる意識（あるいは思考・観念・表象）を分析するというものである。これは、典型的にはデカルトに、また一般的には 17・18 世紀の多くの哲学者に認められる。他方、新しいメソッドとは、公共的（ないし間主観的）とされる言語（あるいは命題・言明・文）を分析するというもので、典型的にはフレーゲ、ラッセル、そしてカルナップを中心とするウィーン学団に認められる。このような意味での「言語論的転回」については、間違なくウカシェヴィッチも、その強力な賛同者・推進者のひとりであった。もっとも、言語分析の道具としての数理論理学について、ウカシェヴィッチは「三値論理」という非古典的な体系を創案したのではあるが、いずれにせよ、彼がメソッドとして言語（命題・言明・文）の分析を採っていることは動かない。そして、その意味で、ウカシェヴィッチは明らかにカルナップと全く同じ陣営に属していたのである。

しかし、「言語論的転回」という概念は、さらに強い規定のもとで理解することも可能である。その場合、それは単なる哲学のメソッドの転換に尽きるのではない。それはさらに、哲学の問題（哲学で扱うべき問題）の転換をも含んでいる。このような規定を「強い言語論的転回 (strong linguistic turn)」と呼ぶことにしよう。そうすると、カルナップが推し進めたのは、他でもない、まさにこの強い意味での言語論的転回なのである。彼は、従来の哲学が扱ってきたような実在世界の構造に関する問いは、形而上学的な問い——すなわち、答えが出ない運命にある疑似問題——にすぎないと捉えた。そして、哲学はそのような問いを排除し、言語の構文論的分析に専心すべき

であると主張したのであった。他方、ウカシェヴィッチは、哲学のメソッドの転換には賛成であったが、実在世界の構造に関する問いを哲学から排除することには決して賛成し得なかった。本論考の第1節で触れたように、「実在との接触 (contact with reality) を不断に求めなければならない」(Łukasiewicz 1936: 219) というのがウカシェヴィッチの一貫した哲学観だったのである。そして、そのような哲学観ゆえにこそ彼は、言語論的転回が方法論から内実論へと越境することを危険視し、敢然たるカルナップ批判を展開したのである。——以上のような哲学史的な文脈からすると、本論考で考察したウカシェヴィッチによるカルナップ批判は、強い言語論的転回に対する断固とした反対表明として位置付けることもできるわけである。

文献表

- Ayer, A. J. (ed.) (1959): *Logical Positivism* (The Free Press).
- Carnap, Rudolf (1932 [1959]): "The Elimination of Metaphysics through Logical Analysis of Language" (translated by A. Pap) in Ayer (ed.) (1959), pp.60-81.
- (1934): "Die Aufgabe der Wissenschaftslogik" in *Einheitswissenschaft*, Heft, 3 herausgegeben von O. Neurath in Verbindung mit R. Carnap und H. Hahn (Verlag Gerold & Co.).
- (1935 [1979]): *Philosophy and Logical Syntax* (Ams Press).
- (1937): *The Logical Syntax of Language*, translated by A. Smeaton (Open Court).
- ※これは、カルナップが1934年に発表した *Logische Syntax der Sprache* の英訳である。
- (1963): "Intellectual Autobiography" in Schilpp (ed.) (1963), pp.1-84.
- Feferman, A. B. & Feferman, S. (2004): *Alfred Tarski: Life and Logic* (Cambridge University Press).
- Hume, David (1975): *Enquiries concerning Human Understanding and concerning the Principles of Morals* (edited by L. A. Selby-Bigge) (Oxford University Press).
- Łukasiewicz, Jan (1936 [1970]): "Logistic and Philosophy" (translated by O. Wojtasiewicz) in Łukasiewicz (1970), pp.218-235.
- (1970): *Selected Works* (edited by L. Borkowski) (North-Holland).

Schlick, Moritz (1934 [1959]): “The Foundation of Knowledge” (translated by David Rynin) in Ayer (1959), pp.209-227.

Schilpp, Paul Arthur (ed.) (1963): *The Philosophy of Rudolf Carnap* (Cambridge University Press).

飯田隆（編）（2007）：『哲学の歴史 第11巻 論理・数学・言語』（中央公論新社）。

蟹池陽一（2007）：「ウィーン学団とカルナップ」、飯田（編）（2007）所収（pp.431-75）。

カルナップ、ルドルフ（1986 [1932]）：「科学の普遍言語としての物理的言語」（竹尾治一郎 訳）、坂本百大（編）（1986）所収（pp.185-240）。

坂本百大（編）（1986）：『現代哲学基本論文集Ⅰ』（勁草書房）。

丹治信春（2009）：『クワイン——ホーリズムの哲学』（平凡社）。

ヒューム、デイヴィッド（2004）：『人間知性研究 付・人間本性論摘要』（斉藤繁雄・一ノ瀬正樹 訳）（法政大学出版局）。

松田克進（2022）：「ウカシエヴィッチによる決定論批判」、龍谷哲学会『龍谷哲学論集』第36号所収（pp.1-28）。

——（2023a）：『スピノザ学基礎論』（勁草書房）。

——（2023b）：「スピノザとウカシエヴィッチ——決定論を巡る対立——」、松田（2023a）所収（pp.261-79）。